

氏名	朴 起 煥
学位(専攻分野)	博士(農学)
学位記番号	農博第1497号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	農学研究科生物資源経済学専攻
学位論文題目	切花産業の経済分析と発展可能性に関する研究 ——主要部門別韓日間の比較・分析——
論文調査委員	(主査) 教授 小田 滋 晃 教授 加賀 爪 優 教授 吉田 昌 之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、韓国の近年における農業部門の全般的な縮小・停滞傾向にもかかわらず、生産農家に高所得をもたらし、発展してきた切花産業に注目した。その上で、今後も切花産業が持続的に安定して発展するための課題を、相対的な先進性を持っていると考えられる日本の切花産業との対比を重視して導出することに焦点を当てたものである。具体的には、切花産業の諸側面を生産(産地)、流通、消費、輸出入等の各部門に分解しつつ、それら部門別の実態把握とともに問題点の導出と分析を行い、課題に接近するという方向を本論文においては基本的に採用した。

本論文における章別の研究結果を要約すると次の通りである。

第1章では、本論文全体の構成を鳥瞰することを目的とし、韓国における切花産業の諸側面を分解して提示した生産(産地)、流通、消費、輸出入等の各部門と各章の枠組みおよび課題との関連を、図式等に要約しつつ執筆者の問題意識をベースとして明らかにした。

第2章では、韓国において花き産業の成長を主導している切花産業がいかなる過程を経て発展してきたのか、また切花の作目別生産構造がいかなる変化を通してバラ中心に成長してきたのか、について考察した。また、韓国における代表的な切花作目の一つであるバラの産地拡大と集中度の推移とについていくつかの統計指標を援用して分析を行い、バラの生産が急激に拡大している要因を検討した。そして、このようなバラの生産拡大によって産地間競争関係がどのように形成されてきたのか、について作型を通じた考察を行いつつ、市場での産地間価格差を卸売市場のセリ実績データを用いて分析した。さらに、バラは生産拡大によって市場への出荷量が増加している状況にあるため、産地が出荷量を増加させる場合、その出荷量の変動が各産地価格に及ぼす影響を Armington モデルを援用して計測し、その計測結果に基づいて栽培農家の対応策を提示した。

第3章では、韓国において持続的な成長を遂げてきた切花産業がどのような流通構造を持っているのかについて、流通経路、卸売市場における切花取扱いの現況、市場主体別運営実態等に注目しつつ把握し、その上で韓国における花き卸売市場流通の問題点とその所在を整理した。他方、日本では「卸売市場法」の改正と花き卸売市場の計画的な整備・統合が推進された結果、流通構造の中核として第3セクター等の整備・統合卸売市場が非常に重要な役割を果たしてきている。そこで、先進事例として日本の整備・統合された花き卸売市場における現況および切花の取扱い動向、取引実態などを比較・分析し、日本の花き卸売市場を取り巻く近年の動向を把握した。これに基づいて韓国の花き卸売市場への示唆を提示し、栽培農家の安定的な出荷のための対応策を示した。

第4章では、韓国における切花の卸売価格の変化と切花価格の季節性、産地間価格差、経済状況による価格への影響などについて花き卸売市場のセリ実績データを用いて整理し、切花の品質特性と価格差について分析した。また、切花の品質特性指標が卸売市場価格の形成にどの程度寄与するのかを Hedonic Price モデルを用いて計測し、この結果に基づいて栽培農家が市場でより高い価格を得るための対応策とともに、価格安定のための政府の支援方向を提示した。

第5章では、切花の消費額が国民所得の増加によってどのように変化しており、「もの日」によって切花の月別消費割合がどのような影響を受けるのかについて韓日の比較・分析を行った。また、切花に対する韓国と日本の消費者の購入行動について、各政府機関が実施したアンケート調査のデータと執筆者が独自に行った切花消費者へのアンケート調査の結果とを用いて比較・分析し、韓日の間にある差について究明した。さらに、後者の消費者アンケート調査の結果を用いて韓国と日本の切花消費の決定要因を、Tobit モデルを援用して分析した。そして、この計測結果に基づいて切花の消費拡大のための栽培農家の対応策および政府の支援方向について検討・整理した。

第6章では、近年輸出が急増している切花産業の作目別・国別輸出入構造を考察し、韓国の主要な切花輸出国である日本の切花の輸入構造および日本への韓国産切花の輸出拡大の要因を分析した。また、日本の花き卸売市場における韓国産切花と他国産切花との競合構造を月別・国別輸入実績データを用いて分析しつつ、日本の花き卸売市場での聞き取り調査とセリ実績データの分析とを通して、韓国産切花の日本での評価や価格水準等について検討・把握した。さらに、この結果に基づいて輸出競争力向上のための対応策を提示した。

第7章では、まず韓国における切花産業の発展方向を示し、今後の課題を提示するための基礎資料を導出する中長期需給モデルの開発とそのモデルを用いた予測とを行った。そして、これらの予測結果を前提とし、特に切花の代表的な作目であるバラが経済成長にともなって生産を拡大できる可能性があるのかについて需給均衡成長率を用いた分析を行った。これらの分析結果と第2章から第6章までの分析結果とを基礎に、切花産業の発展方向と課題を導出した。具体的には、最初に切花産業の各部門別基本目標および最終目標を設定し、次いでその目標の達成のための課題を提示した。このような目標のもとでは具体的な各部門別課題が短期的課題と長期的課題に区分でき、この区分に基づいて生産者、政府および関連機関の役割を検討・分類し、整理した。

第8章では、各章の分析から得られた結果を要約し、本論文の限界と今後の課題および結語を述べた。

論文審査の結果の要旨

韓国における農業は工業化の過程のなかで急激に縮小傾向を示しており、さらに農産物市場開放の影響によって深刻な危機に直面している。しかし、このような状況のなかでも、切花産業は、他の品目に比べて単位面積当たり収益性が非常に高いだけでなく、国民所得が増大するほど消費者の関心が高まるという特徴によってこれまで発展してきた。そこで、本論文は、このような韓国切花産業に注目し、今後も切花産業が安定的・均衡的に発展するための課題を導出するために切花産業の各部門別の実態把握と共に、その問題点の分析を行った。また、これらの問題がもたらす影響と要因の計測およびその克服のための課題を提示する前提として計量経済学的手法を重視した分析を行い、それに基づいて各部門別の生産者の対応策および政策的課題を明らかにしている。本論文において、評価すべき点は以下の通りである。

1. 主産地を中心に生産が集中してきた切花の生産構造が、産地の拡大過程の中で、どのように変化しているかを把握するために、まずシフト・シェア分析によって産地の変動効果を分解し、次いでその結果により、特化係数、上位産地集中度、Herfindahl 指数、Gini 係数を用いて産地の集中度を検討している。このように、本論文では産地の構造変化の考察において、表面的分析にとどまらず、多様な統計指標の採用を通してより多角的な分析に成功している。また、作型による切花産地の出荷形態を区分して産地間競合関係の分析を試み、この区分によって市場での産地別・季節別価格差を明確に説明している。さらに、Armington モデルを用いた計量経済学的分析によって産地拡大による出荷量の増加が各産地価格に及ぼす影響を計測し、それに伴う切花農家の産地別所得変動も併せて推定することによって、農家が適地適作を行う場合、価格および所得変動が最小化されることを明らかにしている。
2. 切花の流通経路、市場の切花取扱いの現況、市場主体別の運営実態など、関連データの利用により、一般商人が主導し不透明さが残存する韓国切花流通構造と、花き流通経路の中核として卸売市場法に基づいた花き卸売市場が重要な役割を担っている日本の花き流通構造とを比較・分析し、韓国への示唆を明らかにしている。また、切花の品質特性の中で、内在的差別化要因が価格にどの程度寄与するかを Hedonic Price モデルを援用して計量経済学的に分析を行い、その結果に基づいて市場が要求する等級基準を充足させること、消費者の嗜好に合う花型を選択・出荷すること、高い価格が形成される見込のある品種を選択することなど、生産者の対応策を提示している。特に、分析に用いたデータは非

常に膨大な卸売市場の日別セリ実績（標本数14,538個）を基礎としていることにより、ここから推計されたモデルを通して解釈された生産者の対応策はかなり現実妥当性を持ったものと考えられる。

3. 切花産業の持続的な発展はまず消費拡大が前提となるべきであるという点に着目して、本論文では切花に対する消費者の購入行動を消費額、購入目的、購入頻度、購入先、選好色および品目に区分して究明しており、切花消費が成熟段階にある日本との比較・分析を通して韓国への示唆を提示している。また、韓日の消費者を対象に直接アンケート調査（韓国105戸、日本119戸）を実施し、このデータを用いて切花消費の要因分析を行っている。さらに、Tobitモデルを援用した計測結果に基づいて家庭用切花の消費拡大の誘導、生け花講習所の拡充と低価格切花の提供、年齢別女性の嗜好の把握など、消費拡大のための対応策を提示している。
 4. 近年、韓国の切花輸出が急増化している状況の中で、その輸出量のほとんどは地理的に近い日本へ集中しているが、今後、量的増加ではなく質的向上を図るためには、日本市場で韓国産切花の評価および価格水準の向上が重要な課題となってくる。この点を踏まえ、本論文では、日本の花き卸売市場の関係者および輸入業者を対象に聞き取り調査を実施し、その実態の把握と共に、それに基づいて韓国産切花の競争力向上のための対応策を提示している。特に、本論文で提示している資料の中で、日本市場で取引されている比率が高い切花の品種別・色別・等級別データは、韓国において従来認識されてこなかった情報であり、韓国切花輸出農家において日本市場の嗜好状況に対応する上で極めて重要な戦略的情報を提供するものである。
 5. 本論文は、切花産業の各部門別の現況分析、計測、対応策の提示と共に、中長期の需給予測を行い、最終的には切花産業が安定的・均衡的に発展を持続するための各部門別課題を提示している。特に、提示した課題では、政府の政策方向と共に生産者や関連機関などの役割を分類して短期的課題と長期的課題に区分・整理しており、国によるこの種政策の立案時や切花生産者が行うマーケティング戦略の立案時において重要な基礎資料となりうる。さらに、本論文は切花産業の生産から輸出に至るまで、すべての部門を検討・分析したうえ、具体的な発展課題を提示していることにより、切花産業のみに留まらず、他の農業部門の発展にとっても有効な方策を提示する事例として参考とするところが大きい。
- 以上のように、本論文は韓国切花産業を取り巻く各部門の現況および問題点の把握と、それがもたらす影響について、韓日の切花関連の様々な統計データや独自のアンケート調査データなどの情報を計量経済学的手法を重視しつつ分析・整理し、韓国切花産業の発展のための課題の提示や適切な政策的提言を行っており、産地発展論、農産物流通論、農産物価格論、農産物貿易論、農業政策論に寄与するところが大きい。

よって本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成17年2月14日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。